

文学、あるいは継続する「教養」

カルチャ―

土佐 秀里

一 幸せに生きるための「教養」

人生に究極の目的などというものがあるとすれば、やはりそれは「幸せに生きる」ことに尽きるのではないか。ただ「生きる」のではない。「幸せ」であることが肝要なのである。生きることに痛苦も伴うが、その痛苦に倍加する「幸せ」の実感がなければ、ひとは生きてはいけないただろう。

ならば、「教育」の目的も「幸せに生きる」ことに置かれてしかるべきではなからうか。学校で教わる知識も技術も、すべては幸せに生きるためのものなのだ、と。しかし、知識や技術などというものは、所詮は手段であるに過ぎない。それらの利便性や有効性が、ただちに人々に幸福を齎すわけではない。「幸せ」の本質を考えない知識や技術がどのような災厄を人類に齎すかということを、二十世紀の世界大戦史はわれわれに教えてくれたはずである。

「原子力の平和的利用」と喧伝され、生活を豊かにすると信じられた原子力発電が、いま、われわれの幸せを根底から脅か

している。科学や技術への信頼は崩れ、猜疑心と恐怖心が人々を蝕みつつある。間違っていたのは科学や技術ではない。「安全神話」という呪術的信仰にのみ固執し、安全工学的研究という「縁起でもないもの」を忌避し続けた電力会社と経済産業省の非科学的姿勢にこそ問題があったことは改めて言うまでもない。だが問題は科学性の欠如ばかりではなく、そもそも科学や技術が貢献すべき人々の「幸せ」というものへの省察が欠けていたことにあるのではないか。電力の安定的供給が、心身の健康よりも優先するはずはないのだが、現実の社会においてはそうした優先順位が転倒するような倒錯的事態がしばしば出来る。

つまりこういうことだ。学校において教授されるべきは知識や技術だけであってはならない。「生きる力」の教育が必要だというのならば、自分にとって、人間にとって、「幸せ」とは何かということを考え（させ）る教育活動が行われなければならないということである。そしてそれは「心の教育」「徳育」である以上に、実は「知育」でなければならない。「幸せ」を

感覚や情緒にとどめるのではなく、論理に高めなくてはならない。問われるべきは考える力であり、それを説得的に他者に伝達する力である。

幸せの本質を考える教育。それは、道徳教育ではなく、宗教教育でもなく、「文学教育」こそが担わなければならないと私は考える。なぜなら「幸せ」は、道徳的正しさではなく、宗教的真理でもないからだ。「幸せ」は日々の個別具体的な喜びや哀しみのなかにある。それを人生に寄りそって描くものが「文学」である。文学は「正しい答え」を提示するものではない。文学はただ歓喜や悲哀や苦悩や葛藤を記録し、提示する。そして文学は情緒的感覚的なだけでなく、知的論理的に構築され、記述され、読み解きうるものとしてある。

文学の教育を担うのは、小・中・高等学校においては「国語」の授業であり、大学においては「文学」の授業である。そして「文学」の授業は、文学部以外の学部では「教養教育」に位置づけられることが多い。

正規のカリキュラムにおいて「教養教育」と名づける以上、それは決して趣味とか余技とか雑学の範疇にとどまってはなるまい。あるいはまた「教養教育」が、基礎教育とか準備教育とか導入教育として「専門教育」の下位に位置づけられることに甘んじてはならない。教養教育は、専攻の差異や学年の差異や、さまざまな差異を超えて遍在する教育でなくてはならない。そしてそれは一時的な通過点ではなく、人生において持続的な意味をもつものでなければなるまい。

教養とは全人格的なものであり、それゆえに「文学」こそが教養の中核を担うにふさわしい。そのことをいまあらためてここに説いておきたい。

二 「教養」概念をめぐる混乱

初等教育や中等教育の課程では、その教育活動を「教養」という言葉で語ることはまずないだろう。「リベラルアーツ」という教養観に立つなら、初等・中等教育こそが「教養教育」ということになるはずだが、これまで「教養」の教育は専ら大学教育において論議の対象となってきた。そしていま、大学における「教養」の位相は激動の渦中にある。

かつて四年制大学には「教養部」や「教養課程」が置かれ、「一般教養」の授業が行われてきた。だが一九九一年の大学設置基準改正、いわゆる「大綱化」によって、ごく一部の大学を例外として、「教養部」のほとんどが既存の学部へ解体吸収されるか、あるいは新学部へと発展的解消を遂げた。語学教育は自由化され、「教養教育」はもはや不要という印象を決定づけたのである。

ところが二〇〇〇年代に入ってから再び流れは急変し、この数年、国立私立を問わず、多くの大学において、「リベラルアーツ学部」や「国際教養学部」だのを新設する動きが盛んとなつてきており、また一学部一学科というような学科統合の流れも活発になつてきている。これは明らかにアメリカ流の「リベラルアーツ・カレッジ」化を目標する傾向と見るべきであろう。

さらにその傾向を後押ししているのが文部科学省である。さ

すがは「ゆとり教育」の舌の根も乾かぬうちに「学力重視」の旗を振り始めるという節操のない役所だけあって、教養教育の軽視を領導したことなどすっかり忘却の彼方で、いまや大学院修士課程にまで「教養教育の充実」を言い出す始末である。こうした朝令暮改の方針のおかげで、教養教育は不要になったり重視されたりしながら現在に至っている。

しかし問題は、そうした浮き足立った動向にあるのではない。そこで名指されている「教養」の実態こそが問題なのである。

近代日本における「教養」観については、すでに教育社会学などの領域においてすぐれた実証的研究が積み重ねられてきている。それらの成果を踏まえた上で荒っぽくまとめてしまえば、「教養」という語には二つの異なる概念が混在しているということになる。その一つは「ビルドゥング」あるいは「カルチャー」の訳語としての「教養」であり、いま一つは「リベラルアーツ」の訳語としての「教養」である。大正教養主義の「教養」とは前者であり、現在話題にされる大学教育の「教養」は専ら後者の謂いである。

なぜそのような概念の混乱が生じたのかといえば、前者の「教養」を信奉していた旧制高等学校が、戦後の教育制度改革のなかで、新制大学の「教養部」へと移行させられたからである。GHQ主導の教育改革においては、新制大学にはアメリカ同様の「ジェネラル・エデュケーション」あるいは「リベラルアーツ」の課程が置かれた。それを「教養」と訳したことが混乱の始まりであつたわけだが、この混乱はいわば意図したものであつた

といえよう。つまり、大正教養主義的「教養」の牙城であつた旧制高校にアメリカ流「リベラルアーツ・カレッジ」の役割を担わせるため、あえて親しみ深い「教養」の語を冠し、連続性を演出することで移行を円滑なものにしようとしたということなのだろう。戦前のドイツ的「教養」概念と、戦後のアメリカ的「教養」概念という、本来矛盾・対立するはずの二つの概念が、都合良く同居してしまっているのである。

なぜこの両者は矛盾・対立するといえるのか。まずはつきりさせておくべきは、「リベラルアーツ」なる言葉の意味である。おそらく多くの人が、「リベラル」という語感を都合良く曲解しているのではないかと思われる。事新しく言うのも気がひけるが、リベラルアーツの「リベラル」とは、「内容が自由」ということを意味しない。それは「自由市民^{リベラレス}」という古代ヨーロッパにおける特権的な社会階級を意味している。そしてリベラルアーツ（アルテス・リベラレス）の学科目とは、文法・論理学・修辞学・算術・幾何・天文学・音楽である。これらはいわゆる「読み書きソロバン」の類であり、古代ヨーロッパにおける「実学」である。そこには文学とか哲学とか歴史学といった人文知の要素は含まれていない。女性を排除し、奴隷を排除し、異邦人を排除して閉鎖的に成り立つ「自由市民」の特権性を保証するための実用的技術こそがリベラルアーツの歴史の実態であつたということを、都合良く忘却してはなるまい。

それに対して「ビルドゥング」や「カルチャー」の語には、高度に精神的な形成・陶冶の意が強くこめられており、人生的

な課題としての「教養」という含意がある。従って、その中核を担うのは、哲学であり、歴史であり、芸術であり、文学でなくなくてはならない。実は現在においても、多くの人が「教養」と考えるのはこちらではないだろうか。文法や算術ができる人のことを、「あの人は頭がいい」と言うことはあっても、「あの人は教養がある」とはまず言わない。文学や芸術にいくら造詣が深くて、「頭がいい」とは言われないが、「教養がある」とは言われるだろう。そこには即効性のある知識や技術とは異なる、豊潤な「文化」の趣がある。しかしそれをたとえば「文化資本」などと言ってしまふといささか功利的に響き、また階層化・選別化の指標として機能しかねない。「教養」文化とは、誰もがアクセス可能な、公共的なものでなくてはならないと私は考えている。

私が重視したいのは、教養主義的で旧制高校的な、いささか時代錯誤の観もある「カルチャー」としての「教養」のほうである。人生いかに生きべきか、という「教養」である。最近の「教養教育」復活の動きが、リベラルアーツすなわち「読み書きソロバン」教育の強化を目指すものである限りは、私はその潮流に棹さす気にはなれない。なぜならそこには原理的に「文学」が抜け落ちるはずだからである。リベラルアーツの原義が階層化・選別化を自明の前提とする有用な技能の修得である以上、それは「文学」とは決定的に相容れない関係にあると言わざるをえない。なぜなら文学とはその過剰な無用性において、人間の無用性を徹底的に擁護するものだからである。「自分の

やうなもので、どうかして生きたい」「ミンナニデクノボー トヨバレ」といった反語的な存在の肯定にこそ、文学という無用物の存在意義はある。

もちろん「読み書きソロバン」の技術教育は「幸せに生きる」ためにも必要なものであり、意味のあるものに違いない。私はリベラルアーツ的な技能の教育が不要だと言いたいわけではない。ただそれを「教養」と呼ぶべきではないだろうと思うのである。それは正しく「基礎教育」と呼ぶべきものであり、本来、初等教育が中心的に担うべきものである。近年、「学力低下」を補うためのリメディアル教育もまた大学において盛んになってきているが、それを「教養教育」という美名のもとに行うことは、公教育の破綻を糊塗しようとする詐術にすぎない。最高学府で行われるべき「教養教育」とは、すでに「基礎教育」で得られた知識や技術を前提とする高次のものであるべきで、なおかつそれは「専門教育」を補完するものでなくてはならないと考える。

なお付言するなら、多くの大学が「教養学部」化を推進するのは、進路の定まらない受験生を集めるための経営戦略に過ぎないし、文部科学省が懸命に「教養教育」復活の旗を振るのは、大学生の「学力低下」批判をかわすための方便でしかないだろう。ただ、「白熱教室」なる新たな規範を伝道したハーヴァードのようなリベラルアーツ・カレッジをいくらか模倣しようとしても、現在の日本では、たい無理な話であることは認識しておくべきであろう。東大駒場やICUのような例外的な成功例は、

教養教育をカレッジ・アイデンティティとし、リベラルアーツ・カレッジとしての歴史と伝統を有する大学であったからこそ可能になっていたのを見逃してはならない。そして何より東大やICUが、ハーヴァードと同様に、最初からきわめて優秀な学生を集めることのできる大学であるということも忘れてはならない。そもそも、社会的ステイタスを得るためには大学院に進学するのが当然である米国と、大学院に進学すればそれだけ就職の関口が狭くなる日本とは、「大学」の位置がまるで異なっている。グラデュエーション・スクールにおける「専門教育」という次の段階が前提とされていない限り、リベラルアーツ・カレッジのしかるべき存在意義は担保されえない。四年制大学を出なければ医学部に進学できないとか、大学院を出ていなければ国家公務員になれないといったドラスティックな改革を、学歴差別との批判をものともせず、文部科学省が本気で行うならば話は別だが。

真に「教養」の復興を目指すのであれば、それは「カルチャー」の復興でなくてはならない。そしてその中心に置かれるべきは「文学」であると私は考える。

三　そして「文学」は続く

ではなぜ「文学」なのか。なぜ「文学」でなければならないのか。たとえば、現代日本における最もすぐれた作家のひとりである村上春樹は、文学について次のように述べている。

僕らは「文学」という、長い時間によって実証された領域で仕事をしている。しかし歴史的に見ていけばわかったことだが、文学は多くの場合、現実的な役には立たなかった。たとえばそれは戦争や虐殺や詐欺や偏見を、目に見えたかたちでは、押し止めることはできなかった。そういう意味では文学は無力であるともいえる。歴史的な即効性はほとんどない。でも少なくとも文学は、戦争や虐殺や詐欺や偏見を生み出しはしなかった。逆にそれらに対抗する何かを生み出そうと、文学は飽くこともなく営々と努力を積み重ねてきたのだ。もちろんそこには試行錯誤があり、自己矛盾があり、内紛があり、異端や脱線があった。それでも総じて言えば、文学は人間存在の尊厳の核にあるものを希求してきた。文学の中にはそのように継続性の中で（中においてのみ）語られるべき力強い特質がある。僕はそう考えている。

『村上春樹雑文集』新潮社・二〇一一年、二八頁。

傍点は原文のまま

村上春樹が言うとおり、文学は無力である。無力ではあるが、誠実である。その誠実さとは、「継続性」にある。

右の一節は、オウム真理教のような「カルト」との対比において、「文学」を語っている箇所である。カルトはその明快さ、力強さにおいて若者を惹きつける。「しかし彼ら（カルト）にはなくて僕ら（小説家）にあるものもある」と言って、村上春

樹は、カルトの「即効性」に対して、文学の「継続性」を主張する。カルトは即座に、明快に「答え」を出す、文学はつねに「考え中」なのである。

かつて「北朝鮮は地上の楽園」とか、「放射能で健康になる」といった言葉が喧伝された時代があった。現在の目から見ればカルトの宣伝としか思えないフレーズをシニカルに嗤うだけでは批評精神が欠落している。問題の本質は、それらが結果的に事実反していたことよりも、それらの言葉が「即効性」に訴えようとするあざとい言葉であったことにある。教育改革が迷走を繰り返すのも、きらびやかな即効性ばかりを追求して、教育の本質であるはずの地道で単調な継続性に全く思いを致さないからであることは改めて言うまでもあるまい。

なぜ文学の継続性に意味があるのか。それは、ほとんど連戦連敗にすら見える「無力」な文学のありようこそ、人生そのものであるからだ。人生とは、それでも「飽くこともなく営々と努力を積み重ね」るしかないものである。その、人生の継続性の中にこそ、人生の喜びと哀しみ、人生の幸せがある。そして人から人へ、世代を超え、時代を超えて、さまざまな人生が果てしなく継続されてゆく。そこに唯一絶対の「正解」はないけれど、同じ立場にある者どうしの共感がある。

文学教育は、「種子まく仕事」である、と西郷竹彦氏は言う。

文学によって読者は人間について、人生について、世界について考えざるをえない問いを与えられるというべき

でしょう。文学は「教える」ものではなく、「考えさせる」ものであるというのはそういうことなのです。「考えさせる」といいましたが、もつと的確には人生を「見せる」ものの、いや、もつと切実な表現をすれば人生そのものを読者にも「生きさせる」もの「体験させる」ものというべきかもしれません。

（『虚構としての文学』国土社・一九七一年、八八頁）

文学は人間にとって何が問題であるか、どこにどんな問いがあるかを具体的に示してはくれませんが、作品そのものは、その問題についての解決、その問いについての答えを与えてくれるとはかぎりません。（中略）読者は作品の中にではなく、自分自身のこれからの生活、自分の人生の中で現実の世界そのものの中でその問いを問いつづけていかざるをえないのです。

（同書一〇〇頁）

村上春樹は「作者」の立場から文学を語り、西郷竹彦氏は「読者」の立場から文学を語っている。そういう立場の違いはあるものの、二〇一一年の村上春樹と、一九七一年の西郷竹彦とは、ほぼ同じことを語っているように思われる。そして両者の主張の類似性が四〇年の時差を感じさせないというまさにそのことに、文学の継続性が如実に表れているとは言えないだろうか。

西郷氏が言うように、文学を読むことは、人生を生きること、に他ならない。おそらく「教養」とは、人生の持続性のなかで、

自分を成長させ、社会をよい方向に向かわせるための灯のようなものだろう。それは即効性のある「答え」ではない。しかし人生という持続的な模索の過程に必要なものは「答え」ではないのだ。必要なものは「ともに生きる」ものである。

文学教育は、甚だ特異な教育のありかたを示すものである。それは知識や技術を教えるものではない。それは文学と出会わせる機会を作るといふ媒介的な行為である。そしてそこでは必ず解釈行為が行われなくてはならない。たんなる「読書の時間」であってはならないのである。解釈行為はつねに持続的過程のなかにある。文学の継続性を保持するために、解釈行為は断念されてはならないのである。

解釈の継続性とは、「読みの自由」の美名のもとに解釈を野放図に拡散させる行為ではない。それは、より「深い」解釈を目指す行為である。そこでは解釈の闘争的対話が行われなくてはならない。言い換えれば、反証可能性のある解釈が提示されなくてはならない。したがって「自分はこう読みたいからこう読む」とか、「作者に聞くしかない」「結局作者にしかわからない」とか、「解釈は人それぞれでいい」といった「逃げ」は、反証可能性が担保されないから、解釈として認められない。

たとえば「寄席の大喜利に唯一の「正解」はない。しかし「面白い答え」と「つまらない答え」の差は歴然としている。面白い答えとは「深い」答えであり、つまらない答えとは「浅い」答えである。文学教育の場において、その差異は明瞭にされるべきだと私は考える。もっと露骨に言えば、「浅い」考えが批

判されることで、より「深い」考えへと向かうことが求められる場であるべきだと思うのである。

解釈とは作品との対話であり、複数の解釈をぶつけあうこともまた対話である。対話が継続可能であるところに、文学の継続性がある。「古典文学」とは、そのような継続性を生き続けてきたものの謂いに他ならない。

文学は、その対話性と継続性において、きわめて人間的な文化であるといえる。だからこそ文学は必須の人間的「カルチャー教養」たりうるのである。人間が人間である限り、教養教育としての文学教育が、その重要性を失うことはないと私は信ずる。

(二 松学舎大学)